

SHUNKEN 2003-11 31-03



駿建

2003年秋期号 Vol.31 No.3 日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科



JIA新人賞を受賞して

佐藤光彦



引越後の写真（撮影：ナカザアンドパートナーズ）



筆者略歴

- 1962年 神奈川県生まれ
- 1986年 日本大学理工学部建築学科卒業
- 1986年 伊東豊雄建築設計事務所
- 1993年 佐藤光彦建築設計事務所設立
- 2001年 吉岡賞
- 2002年 グッドデザイン賞
- 2003年 JIA新人賞

このたび、「西所沢の住宅」という作品でJIA新人賞を受賞したのですが、実はこの賞について、つい最近まで、自分で応募しなければ審査の対象にならない、ということすら知らなかったのです。そこで今回はぜひ応募しようということになったのですが、当初は別の作品、「仙川の住宅」(jt0002／吉岡賞受賞)か、竣工したばかりの「江東の住宅」(jt0306, GA62)での応募を考えていました。受賞作は、賞に応募するには少しおとなしすぎると思っていたのです。ところがちょうどその頃、この住宅が一般誌の取材を受けることになったのですが、そのとき撮影された写真が実に素晴らしく、魅力的なものだったのです(左頁写真)。建築専門誌に載る写真は、家具もない、人もいない状態のものが多いのですが(表紙写真)、今回の写真は、家具や人も含めて異様なくらいモノであふれかえって、建築誌(jt0108)で発表したときは全く異なった印象となっていました。しかし、そのような状態こそがこの住宅の当初の設計意図でもあり、ぜひこの写真を使って応募してみたくなくなったのです。

そんな、偶然ともいえる経緯での応募だったのですが、どういふわけか、例年より多い応募数の中から現地審査に残り、その後受賞に至ったという次第です。

この建物は東京近郊の住宅地に計画された、夫婦と3人の子供のための住宅です。敷地は南北に細長く、面積は40坪弱、これまで都内で設計してきた住宅と比較するとだいぶ広いのですが、郊外の5人家族のための住宅としては普通の広さといえます。当初は平屋のコートハウス案なども考えたのですが、コスト(57万円／坪)なども考慮して、木造総2階というごく一般的な規模と構造とすることで検討を進めることにしました。

またその際、できる限り単純に、平易に記述できるような平面となるように心がけました。住宅の平面によって家族のあり方や新しい生活の提案をすることに興味がないからでもあります。ここではそのようなフツウの建物を、少しずつ異なった解釈と操作で取り扱うことによって、どこまで異なった様相の建築となり得るのかを試みたかったからでもあります。

見慣れた平面図や断面図、あるいは仕上げの材料などを、少しずつ違った方法で取り扱ってみる、トレースし直してみる。例えば、平面図を引き伸ばして敷地の輪郭に重ね合わせてみる。壁や床や家具をすべて同じ表層として扱ってみる。あるいは、既に「打放しコンクリート(©安藤忠雄)」という記号となってしまった壁に、薄くモルタルを塗り重ねることによって、本来の「コンクリート」として取り扱えるようにする。室の仕上げをほんの少しだけ削ってみる。そのような作業によって、少し異なった建築の状態があらわれてくるのではないかと

と考えました。

総2階という規模に設定すると、建物は敷地の約半分を占めます。様々な配置が考えられますが、ここでは建物を道路側に寄せ、南側に庭を残すというオーソドックスな配置としました。そして、残された敷地と建物の関係について、「庭と建物」あるいは「外部と内部」という関係として計画するのではなく、1階の平面を南北方向だけ拡大コピーして敷地に重ねてみるという操作をしました。これによって、本来は内部にあるテーブルが外部にはみ出し、キッチンカウンターが異常に長くなっています。また、この敷地はレベル差があるので、キッチンカウンターの高さまでをRCとしています。この断面もそのまま外部にも延長されるため、庭と建物全体を低い腰壁で囲んだ「ハーフコートハウス」とでもいうような状態となり、同時に通常の床と壁という分節から逃れられてもいます。

建物が「住宅」である場合の特徴として、比較的狭い空間に高密度で様々なものが存在し、その数や配置は流動的に変化し続ける、ということがあげられます。それらすべてをデザインしコントロールすることなど不可能ですし、するべきでもありませんが、建築家が設計した部分とそれ以外のものたちが「ごった煮」のような状態になることを回避するために、異なったスケールを導入したり、分節の状態をずらしたりするような操作は有効であると考えました。

子供部屋の内部はすべて構造用合板で仕上げられ、床・壁・天井・家具という最低限の分節さえありません。2階の廊下に相当する部分では内側からのプロポーションで外形が決定され、廊下であると同時に1階への採光装置になっています。庭側の外壁と床と隣地境界のブロック塀は同様にモルタルで塗り込められています。

小さな住宅を設計していると、これまでの機能論や計画学では物理的にもうまく対応できないこと、説明できないことが多いのに気付かされます。住宅ですらそうなのですから、建築の設計には、実はまだよくわからない部分が多いのではないかと思います。

私は、その「よくわからない部分」について考え続けていきたい、できればひとつのプロジェクトごとに、何かひとつでも新しい発見や提案をしたい、と考えています。そして、それは「よいデザイン」などという曖昧なものではなく、あらたな建築をつくるための「道具」や「材料」たりえるような「設計の技術」とでもいうべきハードコアなものでありたいとも思っています。

今回の受賞でそのような取り組み方が評価されたのであれば、大変うれしく思います。

(さとうみつこ・非常勤講師)

京の町家学生設計コンペティション

最優秀作品賞を受賞して

大平貴臣 丸吉泰道



スタディ模型

このコンペは、「京都の町並はこのままで良いのか」という問題意識から京都の建築職人団体が主催したものです。全国の学生から新しい京町家の提案を募り、最優秀賞受賞者が実施設計、現場を経て建設、一般に建売販売されるプロジェクトです。今回のテーマは、10坪京町家。与えられた敷地において区割も含め4棟以上の京町家を提案するというものです。応募総数286作品の中から第1次審査(2003年6月)で7作品を選出。第2次審査公開プレゼンテーション(同6月)を経て、最優秀作品に選出されました。2月末に完成予定、一般公開されます。

敷地は二条城から東へ少し入った、伝統的な京町家が虫食い状にマンションや現代住宅に建て替わって、新旧が混在した町並の中にあります。周辺環境との接点をど

う捉えるかが設計の要だと考えました。僕たちの案は、間口が狭く奥に長い京町家を折畳むように積層し、それを並列配置したものです。各棟の南側には、外部を取り込んだ通り庭が立体化したものができ、これを隣家が共有するように計画しています。これは、建売販売で不特定の世帯が住むことも考慮して、直接的に空間がつながるような強い関係ではなく、光を共有するぐらいの弱い関係が良いと考えた結果です。この通り庭ゾーンが通風と採光を確保します。さらに、この領域には、3層にすることによって家族の距離を隔て過ぎず、また、外に閉じ過ぎないように、気配が感じられるような設定をしています。1棟1家族という枠組みを少し広げる試みです。

応外通家 オウトツカ

~折畳まれた通り庭をもつ住戸~

企画主旨
人との生活の中で最後に閉居する町家と町家型には様々なように感じられてきた。町家の間取りは、狭いながらも、健康や快適でない建築の増え、都市的な変化に伴ってある今日の都市部、私達が保持してゆくべき要素は、単純の間取りだけではなく、もつと深い二重にある。それは、生活様式と住空間構造の両方に伴って育れてきた個人と町、個人と個人との「縁起」の不在による「歴史」に次ぎるといふ意識の欠如である。ここでは町家や歴史、伝統の継承を願う。

それは、いわに今日の都市における生活様式にあった「縁起」をもつ町家型を再考する必要がある。歴史は、伝統、歴史という「排他」するもの現代の生活様式の変化に伴い「変容」する空間構造を構築することである。新たな「縁起」をもつ町家型を再考する。狭小住宅の域を超えて、3棟の京町家である。

ここでいう「縁起」は、空間を連続的に結合し、1棟の空間を分けながら動作では互いに異なるプライベートな領域に導入して連続的なものでない。通りの気配、様々な見の共有、あるいは、家の中の「空気」を生活の中で感じながら暮らすという、たわやらかい結びつきである。具体的には、各々の家は、「折畳まれた通り庭」をもつ2層外、外部空間の縁の南側を貫いていく。それによって平面は、凹凸形成を有し、住空間に自然光と風が十分に通り抜けていく。その縁起は、凹凸(対面室)のように縁起が凹凸平面にわたる「縁起」を、縁起、自然が「縁起」空間である。町家の通りと縁起をもつことで、1棟、1家族という住まいの枠組みをゆるげる試みである。

作品名/4棟の京町屋

1階平面図 階尺1/200

2階平面図

3階平面図

4階平面図

縦断面図

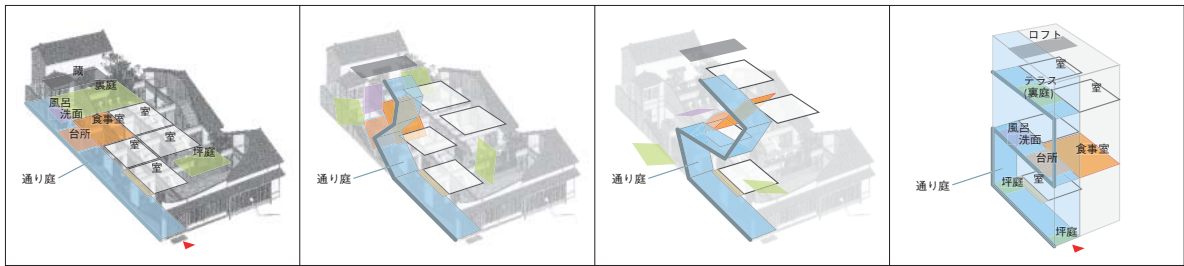
ダイアグラム1. 窓と壁を折畳み再構成

ダイアグラム2. 階色のゾーン

ダイアグラム3. 縁起の計画

ダイアグラム4. 縁起方向の構成

ダイアグラム5. フレキシブルな平面



一般的な京町家の構成を折畳んで積層する。折畳まれた通り庭を持つ新しい町家として再構成

このコンペでの一番の成果は、二人で勝ち取ったということです。私たち二人だけでコンペに参加したのはこれが初めてでしたが、意外にもこの設計に関するポイントにあまりズレはなく、案ができていきました。この要因は、コンペの規模が1カ月の短期間で、集中的に設計するのにぴったりだったということと、特に、二人で京都の町を見てまわりながら、京都の都市や町家などについて話す中で、共通の認識や問題意識を深める機会があったということではないかと思います。二人の持っているものが、「町家」という共通言語を使って、一つの作品に仕上がり、全国の同世代の学生の中で勝ち上がったことは、とても自信になりました。

(まるよしやすみち・今村研M2)

建築をつくることは、とてもヘビーだと実感しています。京都という場所もあります。社会的責任も考えますし、抽象的であったことを詳細まで考えることが必要になります。また、坪45万円という予算も大きな壁です。

最近、つくるプロセスにおいて重要なのは、コミュニケーション能力だと感じています。特に言葉が難しいです。図による伝達は必要ですが、職種や立場が異なる人が多く集まっているプロジェクトの中で誰に対しても、こういった言語を使って自分の考えを伝えるべきかをよく考えます。深夜バスで京都日帰り、急な変更要求、なか卯に依存、などなど、いろいろとしんどい…ですが、面白い！ 実際につくることは、

(おおひらたかのり・今村研M2)



オリエンテーション報告

石垣秀典



今村先生設計の太田市立
沢野中央小学校の見学
(Bコース)

2003年6月21日に、恒例となっております建築学科2年生を対象としたオリエンテーションが実施され、関東近郊の建築関連施設見学を通じて教員と学生とが親睦を深めました。企画された8種類のコースは、各先生方の専門性が活かされたものとなっており、Aコース～Dコースは貸切バスで、Eコース～Hコースは鉄道などの公共交通機関を使って見学場所を移動しました。その見学場所は、歴史的建造物、最近話題の建築、建設現場など多岐にわたっており、見学先で行われるOBの方々や教員の専門の見地からの説明に、首を傾げながらも熱心に聞き入る姿が目映りました。

2年次からは、建築の専門科目の授業が数多く設定されているものの、まだ新年度が始まって3カ月たらずの時期ですので、初めて聞く専門用語や初めて目にする建設現場の状況に、戸惑う様子がうかがえました。この経験を記憶にとどめてもらい、これからの勉強に役立ててくれることを願っています。

当日は、見学後あるいは昼食を兼ねての懇親の場も用意されており、266名(参加率93%)の参加学生は普段の授業とは違うリラックスした形式で、教員とのコミュニケーションが図れたのではないかと思います。2年生の駿河台校舎移行を歓迎する意味でのこの企画が、今後も多数の教員・学生の参加によって継続されてゆくことを願います。

(2年生クラス担任・いしがきひでのり・助手)

Aコース『千葉県の近代建築を訪ねる』 アミュゼ柏、花と緑の文化館、東雲の集合住宅 他 ◎若色峰郎、関口克明、柳田 武、渡辺富雄
Bコース『設計者を困んで』 埼玉県立新武道館、さいたまスーパーアリーナ 他 ◎斎藤公男、高宮眞介、友澤史紀、今村雅樹、岡田 章、佐藤慎也、宮里直也
Cコース『木造住宅とオープンプラン小学校』 住まいのデパート「ペンタくん」多摩センター店 他 ◎井上勝夫、半貴敏夫、八藤後 猛、富田隆太
Dコース『幕張新都心の街づくり』 幕張新都心 ◎三橋博巳、根上彰生、石田道孝、宇於崎勝也
Eコース『東京下町散策』 東京都現代美術館、東京消防庁本所防災館 ◎安達俊夫、白井伸明、森泉和人、山田雅一
Fコース『環境・エネルギー』 東京ガスエネルギー館、みなとみらい地区と大桟橋 ◎早川 眞、野村 歡、宇杉和夫、蜂巢浩生
Gコース『超高層免震建物の現場見学』 ドレッセル目黒インプレスタワー、恵比寿一丁目共同ビル ◎石丸辰治、石垣秀典
Hコース『江戸から昭和へ 明治期の邸宅と江戸・東京の文化をめぐる』 岩崎邸、震災記念堂、江戸東京博物館 ◎片桐正夫、大川三雄、重枝 豊



幕張新都心にて都市計画の勉強 (Dコース)



大川先生の課外授業 (Hコース)



なごやかな懇親会の様子 (Cコース)

オープンキャンパス報告

森泉和人

近年、高校生やその父母を対象に、大学の教育・研究活動や学生生活の現状を紹介したり、アドミッション・ポリシーを理解してもらうため、多くの大学が「オープンキャンパス」を開催しているのは皆さんご存知だと思います。理工学部でも、去る7月20日(日)に駿河台キャンパス1号館で「CST 駿河台入試フォーラム」、8月3日(日)に船橋キャンパスで「CST オープンキャンパス」を開催し、学部の全体像をつかんでもらうためのオリエンテーション・プログラムをはじめ、各学科のカラーを全面に打ち出した学科紹介プログラムも行っています。

ここでは、駿建の紙面をお借りして、先の両日、建築学科で行った学科紹介プログラムを在学生の皆さんにも紹介します(表参照)。「ミニ講義」とは、大学での専門課程講義レベルに匹敵するような学習内容を、高校生にもわかりやすい平易な言葉で解説する30分講義です。今年、駿河台キャンパス1号館の建築設計に関して高宮先生・石丸先生が、建築家が活躍する広範なデザイン領域について今村先生が、建築と都市計画の役割について根上先生が解説してくださいました。視覚的にわかりやすい教材を先生方が工夫されたおかげで、講義終了後、質問に訪れる元気な高校生も多くみられました。

「学科紹介プログラム」では、建築学科を紹介するパネル展示や、先生方の研究・設計活動を身近に解説してもらえるフェース・ツー・フェースのプログラムが用意されています。今年、卒業制作優秀作品展示コーナー(佐藤先生)、ペーパーストラクチャの実作体験コーナー

ミニ講義

駿河台キャンパス新1号館の建築設計
現代の建築設計について(最近作より)
建築と都市づくり

高宮眞介/石丸辰治
今村雅樹
根上彰生

学科紹介プログラム

学生たちはどんな作品をつくるの?
紙で構造物をつくってみよう!
ユニバーサルデザインって何だ?

佐藤慎也
岡田 章/宮里直也
野村 勲/八藤後 猛

プログラムの詳細は、理工学部WEBページ<http://www.cst.nihon-u.ac.jp/event/nf2003/arch.html>および<http://www.cst.nihon-u.ac.jp/event/oc2003/arch.html>をご覧ください。

建築学科紹介プログラム

(岡田先生、宮里先生)、万人に優しい建築を考えるユニバーサルデザインのコーナー(野村先生、八藤後先生)というラインアップでした。会場内では、高宮研究室、斎藤研究室、野村研究室学生による熱のこもった解説や進路に関する質問に丁寧に答えている先生方・大学院生の姿が印象的でした。また、今年度の建築学科紹介プログラムは、会場デザインや記念品にも特色がありました。教室中央に設置された白い大きなBOXに四方のプロジェクトから連写される様々な建築シーンは来場者をまず驚かせ、BOXに近づいてみると綺麗なデザインが施された缶バッジが貼り付けられており、実はこれがプレゼント…という凝った仕掛けで、見て、触って楽しませてくれました(これらの会場デザインは佐藤先生がデザインされ、斎藤研究室、高宮研究室内の大学院生、学部生が苦勞の末完成させてくれたものです)。

最後になりますが、今年度、ご協力願いました教職員・学生の皆さんには本当に感謝しております。また、高校生と年齢が近くて親しみやすい学生の皆さんが一人でも多くオープンキャンパス運営・準備に協力してもらえると、さらなる盛り上がり期待できます。実際に、過去のオープンキャンパスに参加して、理工学部建築学科への進学を決心された学生も多いと思います。「我こそは…」という学生は、ぜひ、ご協力ください。来年のオープンキャンパスのさらなる発展を祈念して、報告を終わらせていただきます。

(もりいずみかずひと・助手)



来場者と教職員・学生ボランティアの交流風景

会場内に置かれた白いBOX

第35回 建築学生海外研修旅行報告

現代と過去を繋ぐ建築デザインの旅

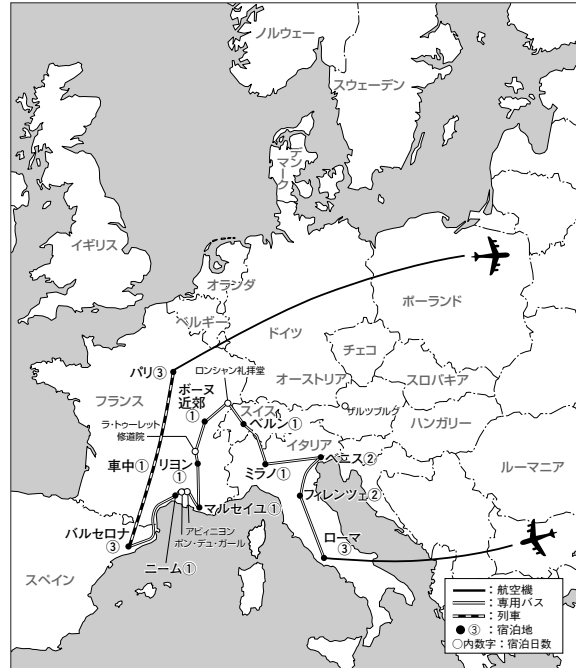
- 〈A班〉日 程 平成15年8月22日～9月12日
引 率 岡村武士助教授
参加学生 34名（3年生：男子19名、女子15名）
T / C 根岸有希子（東急ナビジョン）
- 〈B班〉日 程 平成15年8月29日～9月19日
引 率 今村雅樹助教授
参加学生 30名（3年生：男子14名、女子13名
2年生：男子3名）
T / C 若林君枝（東急ナビジョン）

第35回を数えるヨーロッパ研修旅行は、南欧を中心に、現代建築の源流となったモダニズム建築を、記憶に焼きつくように時間をかけて体感することが特徴である。

最初の訪問国イタリアのローマ、フィレンツェ、ベニス、ミラノでは、歴史的都市を作りあげた偉大な光と影、南仏では、デザインを志向する人たちのバイブル的存在「巨匠・コルビュジェ」の世界、バルセロナでは、光の中で今なお建設中のサグラダ・ファミリアを中心に独特の建築造形「天才・ガウディ」の世界、そして、最後の訪問国フランスでは、歴史と現代が混在するパリを。

新しい“もの”をつくり出すということは、自分の世界観の表現である。そのためには、いろいろな国や都市環境の中で、あらゆる角度から“もの”を見て、知ることである。団体研修の利点を生かした多くの都市と歴史的建築物などとの出会い、記録的な熱波と戦いながら、神秘的で内包された未知なる空間をもったヨーロッパ・時空のディテールは、21世紀の建築家そしてエンジニアを目指す若者たちの目にどのように映ったのだろうか。

（岡村）



A班

空間探検

笠原祥平

今回の研修旅行では数々の有名建築や街並みに実際にふれ、そのたびに衝撃を受けたが、中でも私が大きな衝撃を受けたのが大スパン・大空間の建築だった。ローマのパンテオンやサン・ピエトロ寺院では、いったん中に入るとその空間の大きさに圧倒され、そこに立ち尽くしてしまうという感覚だった。彫刻やモザイクなどの装飾がなくても、圧倒的な空間に包まれているという感覚だけで感動できてしまう建築の魅力を感じた。

フィレンツェのドゥオーモでは大クーボラの構造や建設過程の一端を見ることができ、当時の人々の技術や建設に費やしたであろう労力を想像して改めて驚きと感動を覚えた。これらの古代の建築から、平面図や断面図ではわからない建築の空間・ヴォリュームというものを感ずることができ、それが建築にとっていかに重要である

かということを実感することができた。

一番衝撃的だったのはリヨンのサトラス駅である。遠目から見た外観も特徴的だったが、近寄ったらすごかった。鉄とガラスのホール部分の空間からは構造体の力強さや大スパン・大空間からくる迫力を感じ、その部材などの部分にはそれが構造なのかデザインなのかかわからなくなるような美しさを感じた。ホームに続く通路の屋根は柱・梁に分かれたものではなくコンクリートの造形物のような構造体の連続で、その形態の自由さに感動した。構造については材料の特性を知っているということが表現の自由さを生み、その幅を大きく広げることにつながるのだということを思い知らされた。

サトラス駅に限らずヨーロッパの駅舎や空港は大空間の建築で、そのどれもが構造を積極的に見せていた。これらを見ていて構造とデザインの結びつきというものを改めて感じ、構造体の美しさというものを考えるようになった。

（3年）

構造と空間 宗教

東 圭一

今回の旅行で数多くの建築物を見てきた。偉大な建築家や近代建築など様々な時代、様式のものを見られたのは自分にとって間違いなく今、将来にわたっての財産になると思う。初めて日本を離れて体験したヨーロッパでの建築は何もかもが印象的でたくさんの刺激を受けた。もちろんデザイン、見た目のことは言うまでもないが、自分の中で一番のものは構造の重要さ、巧みさ、また、空間の人に与える影響力だ。

日本では根本的な考えは根付いているとはいえ、宗教というものの影響はヨーロッパや他の国に比べ、それほど大きなものではない。もちろん寺、神社は無数に存在するが、大建築、また、国の中枢を司るほどのものはない。これに比べヨーロッパの各国にはキリスト教をはじめ多くの人に信じられ、人の生き方にまで深く入り込んでいる。長い年月を経ても変わることのないもの、神の存在は僕等日本人にはわからない。しかし、それが人にとってどのようなものか、この旅行ですこしだけわかった気がした。

教会建築というものをこの旅行で初めて見た。あまりにも大きく、また、その存在感、空間の荘厳さなどはなかなか口では説明できないが、素晴らしいものだった。本当に神も存在するのかもしれないと思わせるほどのものだった。様式や年代によって形は異なっていたが、全体的に言えるのは、人に圧迫感を与えないくらいの緊張感が漂っていた。光も適度に落とされ、祭壇に意識が集中するようなものになっていて、建築全体が人を包み込んでいるといった印象を受けた。それを成立させているのは大空間であり、ディテールの繊細さだった。まず何百年も昔に現代人ですら感嘆する構造的な美しさ、また、到底人が造ったとは思えない絵画や彫刻、装飾などは信じられないくらいのものであった。今のように知識、設備が整っていない中でさえ人を感動させるものができる。人間の可能性は無限なのかもしれないと思う。

建築を見るにあたって今まで以上に「構造」というものに興味がわいた。なので旅行中も構造に注目して見て

いた。ル・コルビュジェのような空間を大切にした建築物は見ていてとても勉強になった。今まで見てきた建築と違う所は光の使い方と構造の見せ方だった。光をうまく建築内に取り込み、ロンシャンの礼拝堂がいい例だが、なんともいえない雰囲気を作り出している。また、構造、柱などをあえて見える位置へ出し、デザインの一環として設計していた。このような使い道もあるのかと思った。コルビュジェのことはあまりに有名なので自分が気がなかった建築を見てみたい。

リヨンにあったサトラス駅は現代建築の象徴のようなものだった。スチールとガラスによって成り立っているこの駅は、旅の出発を意味する鳥をモチーフに建てられたそうだ。まず入ってみて驚いたのは中の空間の大きさだった。柱や梁を使わず壁のようなものもない建築でここまで大きな空間が作り出せることがとても興味を引いた。また、構造体も今まで見たこともないような形状をしていたのでいろいろイメージが広がった。

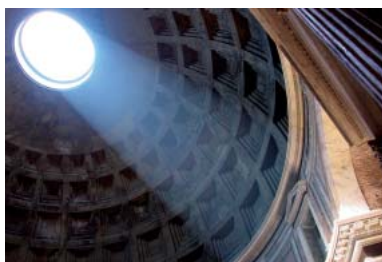
この旅行で大切だと感じたことは、やはり建築にはデザインと構造の両方が高い次元で融合されないといい建築は成り立たないのが良くわかった。そして構造を知ればさらに意匠の分野まで多大ないい影響を与えらると思う。そういった意味で、ル・コルビュジェは偉大な建築家となりえたのだと思う。この旅は貴重な時間だったことは言うまでもなく、自分にとって新しい考えを与えてくれた岡村先生や、みんな、また、旅行会社の方たちにとっても感謝したい。できることならこの経験をもとに自分が発展し、成長していきたい。

(3年)

隠す→見せる

佐藤寿樹

今年の夏はいつもの夏とは違っていた。たいていの夏休みはその日その日をただ何となく過ごしていただけたが、久々に体の底から興奮と感動が湧き上がってくる経験をする事ができた。単なる海外旅行ではない、ヨーロッパの建築と歴史がこれでもかと言うほどいっぱい詰まった22日間だった。こんな経験は一生であるかないか。



バンテオン



ロンシャンの礼拝堂



アビニヨンの



カサ・ミラからの眺望



TGVサトラス駅

貴重な経験をしたと思う。

今回の旅を分けて考えると、最初がゴシック様式の建築、旅が進むにつれて近代建築が現れてくるというものだった。旅が進み、建築物を見るにつれて、1つの共通した考えが生まれてきた。

ゴシックといえば、その装飾に目が奪われるだろう。1つの共通したテーマ（宗教など）をもとに描かれている豪華な絵・彫刻などであるが、その建物を見てみると、外見的にも内部も装飾を見せるためのものといったような額縁的な要素がある。現代にはあまり見られない空間が広がっており、その場に立つと言いやうのない感情がこみ上げてくる。また、内部こそ柱やアーチなどが見えるが、外見的には装飾を前面的に押し出すため、構造を隠した作りになっているように感じた。つまりゴシック様式は建築を「隠す」タイプである。

一方、近代建築を見てみると、今度はその構造や素材を前面に押し出すように変化してくる。ニームのカレ・ダール、パリのラ・デファンスの高層ビル群、カルティエ財団が代表的なところだが、中でもポンピドゥーセンターは普段隠すようなものをすべて見せ、それをデザインにしているのが印象的だった。また、リヨン・サトラス駅はデザイン、構造、材料が1つに合致した作品として衝撃を受けた。

年代が進むにつれて、建築が透明になってゆく。しかし、それだけではなく、1つの建築の中で、その場その場での「見え方」を考えたプランや、材料の使い方の工夫が見える。それは教会の天井絵を作り出した古人の知恵が源になっているのかもしれない（イグナシオ教会など）。その中でも見え方の違いを出してくれるのが、材料を使う上での素材の違いだ。

ゴシックの建築材料といえば、主に「石」だろう。しかし、現代では建築の素材選びの選択肢は無数にある。CorbusierのコンクリートやMiesの鉄、ガラスのように偉大な建築家には代表的な素材が付いて回るが、それは材料を適材適所に使用した結果、素晴らしい建築が生まれたという考えもあるのではないか。その偉大な建築家の時代よりも今は素材の選択肢が多いのである。

隠す・見せるという幅が広がっている今、素材を有効

に使うためにも今回の旅はそのお手本となる建物、素材が数多くあった。それを見たことは一生の財産であり、有効に生かしていきたいと思う。

最大の失敗。フィレンツェでカメラを落とし、ファインダーのレンズがずれて使えなくなったが、リヨンでもう1回落としたら直った!! が、ジョアン・ミロ号の中でもう一度落とし再び壊れたこと…。 (3年)

あの建築を感じて

松崎温子

3週間という期間をこんなにも有意義に過ごすことなんてもうないだろう、とってしまうほどこの旅は充実したものであった。

ずっと行ってみたいと思っていたヨーロッパの国々を4カ国もまわり、さらにコルビュジェのサヴォア邸やミースのバルセロナ・パビリオンをはじめ、建築学生なら誰もが憧れ、興味を持っているであろう多くの有名建築を次々と見てきてしまったのだ。写真やスライドで何度も見てきた建物が今、実際に目の前に建っている。それはまるで自分が写真の中に入り込んでしまったような不思議な感覚であった。正直言って私には、それらの建築に関して、有名だし、みんなもすごいって言ってるんだからすごいだろうな、くらいの考えしか持っていなかった。しかし、実際に行ってみると本当にすごいのだ。ロンシャン礼拝堂といい、ユニテ・ダビタシオンといい、重厚な雰囲気の内空間に差し込む太陽光、明と暗のコントラスト、見事な色彩計画。ただ圧倒されるばかりだった。

それ以前にヨーロッパは、どの国、どの都市に行っても美しかった。建物すべてが重要文化財のようなイタリアの町並み。スペインでは当たり前のようにガウディ建築が普通の住宅とともに並んでいた。いろいろな都市を高台から眺める機会があったが、どこも都市計画がきちんとなされていて素晴らしかった。特にスペインの旧市街の道路計画、パリの凱旋門から伸びた大通りに歴史と知恵を感じることができた。高層ビルから見下ろす東京の騒然とした景色を思い出し、ひどく貧相に感じてしまった。

ただ、3週間も見知らぬ土地ですごいものばかり見続けていると、だんだん感覚が麻痺してしまって、感動が薄くなってきてしまっていた。今思えばなんでもったいないことをしてしまったんだ、もっとしっかり見ておけば良かったと後悔が残る。しかし、こんなにも建築について考え、一生懸命学ぼうとしたことはなかったのではないか。そういった意味でも私にとって貴重な3週間だった。 (3年)

B班

ヨーロッパ研修旅行を終えて

荊山弘志

私にとって、これまで雑誌、写真などでしか見たことのないヨーロッパの生の「建築」たちに逢えるということはこの上ない喜びであり、同時に実際彼らに逢うということは想像の域を超えるものだった。

今回の旅では、各国、各都市それぞれの時間、空気、街並み、建築を思う存分堪能した。ローマのコロッセオでは古代ローマの剣闘士たちに出会い、サンピエトロ大聖堂は母のように両手を広げた柱廊が我々を受け入れた。ベニスでは太陽の下、靴を脱ぎ捨て両足を運河に突っ込み、このまま時が止まればと願い、バルセロナでは天才ガウディに圧倒され、ミースには「less is more」を見せつけられた。フランスでは、大鳥が華麗に翼を広げたようなカラトラヴァのサトラス駅とル・コルビュジェの、ごつごつとした荒っぽいコンクリートで仕上げられたラ・トゥーレット修道院など、同じ日に現代建築と近代建築をいっぺんに見せられ思考回路はショート寸前だった。

このように毎日毎日膨大な量の建築や変化する街並みを見せつけられ、堪能しすぎて完全に消化不良だった。ヨーロッパの持つ、とてつもなく大きなエネルギーに押し潰されまいと毎日必死でこちらも膨大なエネルギーをもって対抗し建物を追いかけた。

旅先では様々な人と様々な意見を交換した。

みんな各々感じ方、考え方、見え方、好みが異なった。また、建築やその空間に対する各々の様々な思いを表現する方法も十人十色だった。このことも今回の旅の収穫の一つであった。とても素敵な仲間たちもできてよかった。

もっと長く、いや、永遠にヨーロッパにいたいと思った。360度どこを見渡しても珍しいものだらけで飽きることがなかった。路地一つでこれほどまでに人を魅了するその見えない力、不思議な空気に永遠に包まれていたいと思った。

今でも目を閉じると、欧州の猛者どもの荒々しい息遣いや、研ぎ澄まされたレイピアのような緊張感、寒い冬の朝の布団のような温もりが私の心のドアをノックする。 (3年)



フィレンツェ

海外研修旅行を終えて

篠原祥子

とにかくよく歩いた。街を知るには歩くのが一番というが、今回の旅行でよくわかった。旅は普段の生活では見落としてしまうような、様々なことを発見することができる。町並みや気候、人々の姿、昼と夜での街の表情の変化など各都市によっても違う個性が感じられた。通りに沿って迫るように建てられた建物で切り取られた空は、ひときわ



バルセロナ・パビリオン

青かった。高い建物からは、東京には見られない統一された美しさを見ることができた。ヨーロッパの都市には東京にはない広場が当たり前のようにある。そこには様々な目的を持った、とにかく多くの人が集まっている。建物は過密に建ち並ぶが、広場によって空間の溜めが生まれる。広場を中心とした都市の構成や、街並みに対する人々の意識が美しい街並みを守っているのだと思うと、さらに魅力あるもののように感じた。

最も印象に残った空間は、ミースのバルセロナ・パビリオンだった。階段をのぼったそのときから、パビリオンを後にするまで空間の劇的な変化は感じなかった。壁が空間を切っているという印象を受けた。すべて面と柱で構成されたこの均一な連続空間は、石や水も無機的な何かに変えてしまっているようだった。気付けば何時間もあるような、時の流れの緩やかさを実感させてくれるような、不思議な空間だった。

今回の旅行で、建築の魅力を知ったと思う。世界の巨匠と呼ばれる建築家や、現代を代表する建築家の作品に触れて、空間の変化や時代の技術の発展を確実に感じる事ができた。この旅行で触れたものはこれからの自分にとって、とても有意義なものになるだろう。お土産や写真を見たり、旅行をご一緒した今村先生、仲間と話すたびに思い出す景色を、いつまでも色あせさせることなく自分の中の大切な物としたいと思う。クールだと思っていた今村先生が実はとても気さくな先生だということや、友達の新たな一面を発見することもできた。私自身、様々な本を読んで、知恵を増やし、旅にでて様々なものを感じ、消化して豊かな人になりたい。 (3年)

ヨーロッパ研修旅行

飛田久恵

私にとって、今までで一番充実した夏休みを過ごすことができました。旅行前に、雑誌や本を見てヨーロッパに対するイメージを作っていました。しかしこの旅行で、今まで本を通してでしか見ることでできなかった建築を直に見たり、触れたりすると、イメージ通りだったり、全く違った感覚が生まれたり…本では見るることができない、自分の中にだけとても強く残る空間も見つけることができました。またその中で、人それぞれ感じるものが違うということを実感しました。建築という同じ目的で来て同じ場所にいるのに、一緒に研修した友達と話してみると、それぞれ感じていることが全く違っていました。

みんなに研修旅行について一言で聞いてみると…。



ヴェネチア☆ビエンナーレ

どこの町並みも東京にはないもので新鮮だった☆コルベジュエとみんなに会えてよかったな☆食べ物は絶対日本のほうが美味しいと実感した☆サヴォア邸で鬼ごっこしたら絶対楽しいと思う☆見るものすべてが新鮮で、驚きの連続でした☆地下鉄に乗っている人全員がジプシーに見えました☆誕生日を皆に祝ってもらって嬉しかった☆建築を見る今村先生は少年のようでした☆ますます建築を好きになった旅でした☆たくさん歩いたので町の空気を感じられ最高でした☆時間がたりなかったよ☆バルセロナ現代美術館に行ってアートの見方が変わりました☆建築に限らず、見聞を広めることができました☆徒歩でのベニス横断で得たものはとても大きかったです☆今度は私のお金で親と来たいです☆しばらくサンドイッチは食べられませんでした☆都市的・空間的に建築を体験できて良かった

最初は長いと思っていた3週間も、終わってみればあっという間でした。そんな短い3週間で得たものは、建築の知識はもちろんですが、友達も増えその上仲が深まったこと、そしてビールの美味しさを知ったことです。私にとって、とてもとてもとてもとてもとても重要な旅行となりました。

(3年)

水の都ヴェネチア

村上潤一郎

そこには、あり得ない景色が広がっていました。街が水に浮かんでいて、人々は水上バスで移動する。迷路のような細い道に、入り込んだ数々の水路。パトカーならぬパトボートまで走っています。まさに、夢のよう。昼間は鳩と人でにぎわっていたサン・マルコ広場も、夜になると演奏会場に変わり、数カ所でクラシックの演奏が奏でられ、老夫婦が踊り、若いカップルが熱い抱擁をしていました。

建築では、ローマ、フィレンツェと渡ってきて、バロックやロマネスク、ゴシックやルネッサンスと、もう遺跡や教会は少し飽きちゃったという感じだったので、カルロ・スカルパの建築やヴェネチア・ビエンナーレを見に行ったときは、むさぼるようにこれらの建築やアートを見て回りました。スカルパの建築は、クエリーニ・スタンパーリア財団、オリベッティ・ショールーム、ビエンナーレ会場のベネズエラ館を見に行き、旅行に行くまで思いを寄せていたスカルパの作品と対面することができました。それらの作品は、ヴェネチアの街に溶け込み、ドアや窓、階段や手すり、鍵穴から庭まで細部にわたるデザインが、全体で調和がとれていて、素晴らしい空間を作っていました。中でも、スタンパーリア財団の庭は今でも手入れがしっかりなされていて、幾何学的にデザインされた池と噴水に、蓮が浮かび、金魚が泳ぎ、綺麗に刈られた芝生と、庭を回れるように敷かれた石壇で、何とも言えない空間、静寂が漂っているという感じでした。

ヴェネチアは他の都市とは違い、特殊な環境ではあったけれども、僕にはイタリアで見てきた都市の中で一番、生活臭さやイタリア人の気質のようなものを感じました。それは、言葉や建物ではなくて、生活を楽しむ、人生を楽しむ、そういう街や人の暮らしの豊かさからにじみ出ていたような気がします。いつまでもヴェネチアの水に揺られていたい、そんな気分でした。次回またここを訪れるまで、どうか沈まないでいて欲しいと思います。

(3年)



水上から見るサン・マルコ広場

2003年度 日本建築学会大会（東海）

建築学科教室関係者発表論文リスト

○印 発表者

材料施工・防火

1049 粗骨材がコンクリートの乾燥収縮に及ぼす影響
○藤本 貴（北海道大大学院）・千歩 修・足立裕介・友澤史紀

1059 強制乾燥および水中浸漬によるコンクリートの乾燥収縮の評価方法の検討 ○足立裕介（北海道大大学院）・千歩 修・藤本 貴・友澤史紀

1114 高品質再生骨材の製造技術に関する開発〔Ⅶ〕
その1 開発の全体概要及び再生骨材コンクリート性状 ○石倉 武（原子力発電技術機構）・友澤史紀・嵩 英雄・小栗第一郎・大西一彦

1202 石炭灰溶融化スラグ有効利用システムの研究
その1 概要 ○清水一都（エンジニアリング振興協会）・石川嘉崇・友澤史紀

1205 石炭灰溶融化スラグ有効利用システムの研究
その4 石炭灰溶融化スラグ細骨材を用いたコンクリート試験 ○石川嘉崇（電源開発）・原 孝志・友澤史紀

1263 低水セメント比コンクリートの養生・放置条件と耐凍害性 ○千歩 修（北海道大大学院）・友澤史紀

1507 建築材料のマテリアルフローとリサイクルの現状と課題 ○越智未紘（北海道大大学院）・千歩 修・友澤史紀

構造Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ

20036 二段屋根建築物の屋根上積雪性状に関する実験的研究 ○高橋裕輝（日本大大学院）・田川洋介・三橋博巳・佐藤篤司

20200 広範囲なひずみ領域における地盤材料の応力-ひずみ関係 砂とセメント改良砂のダイレイタンス特性 ○山田雅一（日本大）・安達俊夫

20214 エネルギーの釣合に基づく液状化判定法 その1 基本概念 ○酒匂教明（日本大大学院）・安達俊夫・下村修一

20215 エネルギーの釣合に基づく液状化判定法 その2 実地盤への適用例 ○下村修一（鹿島）・安達俊夫・酒匂教明

20251 軟弱地盤における戸建住宅の不同沈下挙動に関する研究 その1 圧密沈下式 m_v 法の適用性 ○佐藤浩介（長谷工コーポレーション）・安達俊夫・田村昌仁・志村晃一

20252 軟弱地盤における戸建住宅の不同沈下挙動に関する研究 その2 盛土荷重による周辺の影響 ○志村晃一（日本大大学院）・安達俊夫・田村昌仁・佐藤浩介

20357 建築基礎に関する海外の基準・コードと国内の基準との比較 その1 戸建住宅の基礎に関するCABOのコード ○松下克也（ミサワホーム）・安達俊夫・田村昌

仁・佐藤浩介・志村晃一

20427 可展式トラスドームの開発 その1 Soccer Ball Domeの提案と施工時の安定性について ○徳増紘史（日本大大学院）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・緒方誠二郎・濱野伸洋

20428 可展式トラスドームの開発 その2 実施工と回転剛性の影響について ○緒方誠二郎（東京工業大大学院）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也

20429 張弦シザース構造の仮設建築物への適用に関する研究 その1 アーチモデルの基本力学性状と導入PS量について ○後関孝啓（日本大大学院）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・田中 晃・小倉史崇

20430 張弦シザース構造の仮設建築物への適用に関する研究 その2 耐風ケーブルの影響, 全体座屈性状, および終局耐力について ○小倉史崇（竹中工務店）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・田中 晃・後関孝啓

20436 ケーブル補剛された片持式天秤構造の設計と施工 六本木ヒルズアリーナの構造計画 その1 全体概要 ○早野裕次郎（山下設計）・斎藤公男・石塚 馨・安田正治・近藤豊史・城戸隆宏

20437 ケーブル補剛された片持式天秤構造の設計と施工 六本木ヒルズアリーナの構造計画 その2 構造設計概要 ○城戸隆宏（山下設計）・斎藤公男・岡田 章・石塚 馨・安田正治・近藤豊史

20438 ケーブル補剛された片持式天秤構造の設計と施工 六本木ヒルズアリーナの構造計画 その3 A種折りたたみ開閉膜の開発と実施 ○宇都宮滋人（太陽工業）・斎藤公男・岡田 章・城戸隆宏・長尾 聡・近藤豊史

20445 小規模軽量可動屋根の計画と設計—建築会館のテンセグリックトラス式張力膜 その1 基本構造計画及び屋根架形状の検討 ○金子尚史（日本大大学院）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・下田典大

20446 小規模軽量可動屋根の計画と設計—建築会館のテンセグリックトラス式張力膜 その2 屋根架の構造システムに関する検討 ○下田典大（戸田建設）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・金子尚史

20447 小規模軽量可動屋根の計画と設計—建築会館のテンセグリックトラス式張力膜 その3 ハンガー式張力膜構造の設計 ○塙 祐子（太陽工業）・斎藤公男・岡田 章・鎌田和敏・宮里直也・佐藤裕子

20450 張弦梁構造の座屈性状に関する基礎的研究 その1 模型実験と解析手法の提案 ○高橋令奈（日本大大学院）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・中山和之

20451 張弦梁構造の座屈性状に関する基礎的研究 その2 解析手法の妥当性の検証 ○中山和之（NTTファシリティーズ）・斎藤公男・岡田 章・宮里直也

20452 多雪地域における張弦ドームの構造計画に関する研究 その1 単純支持トラス梁の検討と最適導入PS量の決定法の提案 ○鈴木晴信(日本大大学院)・堀田雄士・斎藤公男・岡田 章

20453 多雪地域における張弦ドームの構造計画に関する研究 その2 解析検討と試設計 ○堀田雄士(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章

20456 スtring補剛されたアーチ架構の構造性能に関する基礎的研究 その1 String配置による基本力学性状の比較 ○廣田麻衣(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章・安藤伸敏

20457 String補剛されたアーチ架構の構造性能に関する基礎的研究 その2 導入PS量とString剛性が力学性状に及ぼす影響 ○安藤伸敏(鹿島)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章

20460 補剛ケーブルをもつ片持トラス構造の振動特性および制御に関する研究 その1 補剛ケーブルが振動性状に及ぼす影響について ○岩淵佳隆(日本大)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・高橋寛和

20461 補剛ケーブルをもつ片持トラス構造の振動特性および制御に関する研究 その2 地震時の挙動と制御について ○高橋寛和(構造計画プラス・ワン)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・岩淵佳隆

20463 ガラスファサードに用いるテンション・トラスの構造特性に関する基礎的研究 その1 研究背景および導入PS量の静的特性への影響について ○市川雄一(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・宮田義之

20464 ガラスファサードに用いるテンション・トラスの構造特性に関する基礎的研究 その2 テンション・トラスの座屈特性について ○宮田義之(フィグラ)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也

20469 テンセグリック・トラス(TypeⅢ)のガラスファサードへの適用について その1 基本構造特性の把握 ○竹内一博(神鋼鋼線工業)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也

20470 テンセグリック・トラス(TypeⅢ)のガラスファサードへの適用について その2 張力導入機構を有するジョイントの設計 ○関口洋平(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・竹内一博

20475 密閉型小規模高ライズ空気膜構造の基本的力学性状に関する研究 その1 直径12mの半球型空気膜構造の避難安全性の検討 ○柳井麻里(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・木村 純

20476 密閉型小規模高ライズ空気膜構造の基本的力学性状に関する研究 その2 内圧変化を考慮した風荷重時の構造性能の把握 ○木村 純(日立製作所)・斎藤公男・岡田 章・柳井麻里

20477 張力膜構造のボンディング現象に関する基礎的研究 その1 小規模模型実験及び解析による基本的メカニズムの検討 ○佐藤裕子(日本大大学院)・斎藤公男・黒木二三夫・岡田 章・中島 肇・宮里直也・宮田真紀

20478 張力膜構造のボンディング現象に関する基礎的研究 その2 仮設建築物におけるボンディング現象の検討 ○宮田真紀(日本E.R.I.)・斎藤公男・黒木二三夫・岡田 章・中島 肇・宮里直也

20479 ばねストラット式張力膜構造からなる大屋根の構造的検討 テクノブレース15の研究報告 ○黒木二三夫(日本大短大)・斎藤公男

20480 大変形を考慮した膜構造物の適正な風荷重評価について ○黒木雅代・黒木二三夫

21156 隣接基礎の影響を考慮した杭基礎群の地震応答解析シミュレーションについて ○池田能夫(大成建設)・下村幸男・小串欣也・安達 洋

21191 P-Δ効果が骨組の倒壊に及ぼす影響 ○遠藤悠介(日本大大学院)・半貫敏夫・秋山 宏

21337 軟節対震構造の可能性に関する研究 ○中野毅(日本大大学院)・石丸辰治・石垣秀典

21339 アンブレラダンパーに関する研究 その1 実大動的加力実験 ○山中祐一(日本大大学院)・石丸辰治・石垣秀典・秦 一平・藤田和典・西塚 正

21340 アンブレラダンパーに関する研究 その2 簡易モデルによるシミュレーション解析 ○藤田和典(日本大大学院)・石丸辰治・石垣秀典・秦 一平・山中祐一

21341 アンブレラダンパーに関する研究 その3 木造建築物への適用事例 ○石垣秀典(日本大)・石丸辰治・秦 一平・藤田和典・山中祐一・吉田明義・小形慶治

21378 亀壁制震壁の動特性に関する研究 その1 鋼製モデルによる動的加力実験 ○小河高之(日本大大学院)・石丸辰治・石垣秀典・秦 一平・長島和央

22140 格子状耐力壁の仕様と剛性制御 ○古林 剛(ミサワホーム)・平山善吉・岸 明・佐藤 理

22141 格子状耐力壁の脚部仕口と耐力 ○佐藤 理(日本大大学院)・平山善吉・岸 明・古林 剛

22313 材料特性のばらつきがP-Δ効果を受けるH形鋼柱の挙動に与える影響 ○日下元彦(日本大大学院)・半貫敏夫・秋山 宏

22370 露出型柱脚を持つ鋼構造せん断型多層骨組の損傷集中特性 ○小久保 彰(日本大大学院)・半貫敏夫・秋山 宏

23101 軸筋の付着を除去したRC柱の力学的挙動に関する実験的研究 その1 実験概要と実験結果 ○石井明男(日本大大学院)・飯田誠次郎・岡田 満・中山 優・福井 剛・浜原正行

23102 軸筋の付着を除去したRC柱の力学的挙動に関する実験的研究 その2 コンクリートのひずみ ○飯田誠次郎(飯田管工)・石井明男・岡田 満・中山 優・福井 剛・浜原正行

23218 複相構造を考慮したコンクリートの3次元ひび割れ解析 その1 コンクリートの破壊挙動に及ぼす粗骨材の影響 ○河村 準(トステム)・田嶋和樹・森泉和人・白井伸明

23219 複相構造を考慮したコンクリートの3次元ひ

び割れ解析 その2 破壊モードと骨材破壊メカニズム
○田嶋和樹(日本大大学院)・河村 準・森泉和人・白井伸明

23222 RC平板のせん断挙動に関する解析的研究 収縮応力が初期ひび割れ性状に及ぼす影響 ○渡部 憲(東急建設技研)・三島隆路・白井伸明

23223 RC造柱・梁接合部の破壊モードと変形状に関する2-Dおよび3-D解析 (その1) 試験体のモデル化と予備解析 ○白井伸明(日本大)・尾崎龍太郎・三島隆路・森泉和人

23224 RC造柱・梁接合部の破壊モードと変形状に関する2-Dおよび3-D解析 (その2) 単調および繰返し解析 ○尾崎龍太郎(日本大)・三島隆路・森泉和人・白井伸明

23225 RC造柱・梁接合部の破壊モードと変形状に関する2-Dおよび3-D解析 (その3) 柱・梁接合部の破壊および抵抗機構 ○三島隆路(清水建設)・尾崎龍太郎・森泉和人・白井伸明

23299 廃棄物の基本物性と構造物への適用性評価に関する研究 その1 磁選砂を内割置換したNMCの力学的特性 ○佐藤眞介(商報舎)・岡村武士・岩田成子

23300 廃棄物の基本物性と構造物への適用性評価に関する研究 その2 複合材の異なるNMCの強度と内部機構 ○岩田成子(日本大)・岡村武士・佐藤眞介

23372 集合住宅を対象とした制震補強工法の適用 その4 実験結果と取付部の性能評価 ○横内 基(青木建設)・北嶋圭二・築井英昭・上田英明・白井伸明・安達 洋

23500 柱梁接合部を有するPC梁の復元力特性に関する研究 その1 等価粘性減衰定数と梁の降伏変形 ○末次宏光(日本大)・内田龍一郎・佐藤信夫・岡田 満・浜原正行

23501 柱梁接合部を有するPC梁の復元力特性に関する研究 その2 復元力特性モデルの実験値に対する適合性 ○内田龍一郎(松井建設)・佐藤信夫・末次宏光・岡田 満・浜原正行

23502 プレストレストコンクリート柱梁接合部の終局強度に関する実験的研究 その1 実験概要 ○岡田 満(日本大)・佐藤信夫・浜原正行・内田龍一郎・末次宏光・中山 優

23503 プレストレストコンクリート柱梁接合部の終局強度に関する実験的研究 その2 実験結果に対する考察 ○佐藤信夫(日本大大学院)・岡田 満・中山 優・内田龍一郎・末次宏光・浜原正行

23504 プレストレストコンクリート柱梁接合部の終局強度に関する実験的研究 その3 入力せん断力の検討 ○中山 優(日本大)・岡田 満・浜原正行・内田龍一郎・末次宏光・佐藤信夫

環境工学 I, II

40020 評価方法基準の「一体として振動する床構造」に該当する合成スラブの仕様の基準(案) ○福島寛和(建研)・井上勝夫

40021 住宅購入予定者を対象とした住宅性能に関する

要求内容 その3 住宅購入時の消費者要求と住宅性能表示制度 ○井上勝夫(日本大)・阿部今日子・植竹由佳・富田隆太・福島寛和・橋本 修

40022 住宅広告・パンフレット・営業担当者による住宅性能の説明内容 その4 住宅購入時の消費者要求と住宅性能表示制度 ○植竹由佳(大森一級建築士事務所)・井上勝夫・阿部今日子・富田隆太・福島寛和・橋本 修

40023 音環境に関する居住者反応と性能表現法 その5: 住宅購入時の消費者要求と住宅性能表示制度 ○阿部今日子(日本大大学院)・井上勝夫・植竹由佳・富田隆太・福島寛和・橋本 修

40029 標準木造床構造による床仕上げ構造の床衝撃音レベル低減の実験室測定方法の検討 ○阿部恭子(建材試験センター)・片寄 昇・米澤房雄・井上勝夫・安岡正人

40030 大型スラブのインピーダンス特性に関する検討 ○石田剛彦(ヤクモ)・井上勝夫・富田隆太

40035 床衝撃音と天井振動応答との関係 高剛性大型スラブの床衝撃音に対する天井の影響に関する研究: その1 ○松岡明彦(戸田建設技研)・井上勝夫・渡邊秀夫・山内 崇

40036 天井振動応答に対する下地材の影響 高剛性スラブの床衝撃音に対する天井の影響に関する研究: その2 ○山内 崇(戸田建設技研)・井上勝夫・渡邊秀夫・松岡明彦

40038 乾式二重床による衝撃力の分散とスラブへの伝達特性に関する実験的検討 ○佐藤伸俊(日本大大学院)・井上勝夫・富田隆太・池浦春華

40042 壁先行と床先行工法における床各部の振動応答特性について ○池浦春華(日本大大学院)・井上勝夫・富田隆太・佐藤伸俊

40049 転倒状況に関する調査及び歩行感覚と動的変位量の対応性の検討 高齢者歩行時の住宅床に関する研究 その3 ○富田隆太(日本大)・井上勝夫・川又周太

40050 転倒時の頭部衝突時を対象とした床仕上げ構造の安全性に関する検討 高齢者歩行時の住宅床に関する研究: その4 ○川又周太(フクビ化学工業)・井上勝夫・富田隆太

40069 仮想音源分布を用いた方向情報の時間変化の検討 ○林 美予子(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・星 和磨

40070 実音場における後期音レベルの時間変化 ○岩元公生(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・星 和磨

40071 方向別インパルス応答によるマイクロホン指向特性の検討 ○西水流大典(日本大大学院)・岩元公生・関口克明・羽入敏樹・星 和磨

40075 壁面と天井に規則的なリブを配した矩形講堂の音響特性に関する検討 ○藤井康太(日本大大学院)・星和磨・羽入敏樹・関口克明・木村 翔

40076 横リブと縦リブの音響特性に関する検討 ○星 和磨(日本大短大)・藤井康太・羽入敏樹・関口克明・木村 翔

40085 周波数特性を考慮した拡声音制御による音声伝達性能の向上についての検討 公共空間における拡声を用いた音声情報伝達・誘導についての基礎的検討 その1 ○橋本 修 (日本大)・天野圭介・佐々木禎枝・山崎大輔・井上勝夫

40086 音場に適した拡声音の周波数制御方法の検討 公共空間における拡声を用いた音声情報伝達・誘導についての基礎的検討 その2 ○山崎大輔 (日本大大学院)・天野圭介・佐々木禎枝・橋本 修・井上勝夫

40087 付加情報を用いた拡声音の到来感向上についての実験室実験 公共空間における拡声を用いた音声情報伝達・誘導についての基礎的検討 その3 ○天野圭介 (日本大大学院)・佐々木禎枝・山崎大輔・橋本 修・井上勝夫

40088 付加情報を用いた拡声音の方向感向上と聞き取りやすさについての実音場実験 公共空間における拡声を用いた音声情報伝達・誘導についての基礎的検討 その4 ○佐々木禎枝 (日本大大学院)・天野圭介・山崎大輔・橋本 修・井上勝夫

40096 オープンスペースの現状把握と児童の捉え方 オープンプラン型小学校の音環境に関する研究 その3 ○笠井 雄 (日本大大学院)・井上勝夫・富田隆太

40151 光の方向性に着目した空間の明るさ感に関する研究 その3 光の「量」と「指向拡散度」から見た評価手法 ○加藤未佳 (日本大大学院)・関口克明

40179 開口部による夜間街路空間の評価に関する研究 ○本村 洋 (日本大大学院)・関口克明・角館政英

40181 認知行動から見た夜間の都市空間構成要素の評価 ○堀江正浩 (日本大大学院)・関口克明・角館政英・野中太郎

40185 夜間街路歩行時の光環境評価 元町の街路照明計画に向けた一考察 ○川島 勇 (日本大大学院)・下坪武史・関口克明・野中太郎・角館政英・小林憲治

40186 周辺部の空間を考慮した夜間街路の光環境に関する研究 岩手県大野村まちづくり整備 ○角館政英 (角館政英光環境計画)・川島 勇・下坪武史・永井俊介・本村 洋・関口克明・野中太郎・小林憲治

40187 危険予測からみた交差点の光環境と夜間景観に関する研究 ○永井俊介 (日本大大学院)・関口克明・角館政英・川島 勇

40372 自然風の性状把握及び心理応答評価に関する基礎的研究 その1 申告装置の試作とその有効性について ○高橋 渉 (日本大大学院)・大森紘子・関口克明

40373 自然風の性状把握及び心理応答評価に関する基礎的研究 その2 自然風の定量化と心理評価実験 ○大森紘子 (経済産業省)・高橋 渉・関口克明

40520 建物内における電界強度及び無線LANによる転送速度に関する測定例 ○鈴木涼太 (日本大大学院)・井上勝夫・高野洋一・吉野涼二

41002 中国黄土高原における新型ヤオトンの環境共生技術に関する基礎的検討 ○吉野泰子 (日本大短大)・関口克明・劉 加平

41091 中国都市住宅における設備と室内温熱環境に関する実態調査 その3 長沙及び北京における夏期調査の結果 ○宮坂拓之 (東北大大学院)・吉野 博・吉野泰子・張 晴原・李 念平・関 山・重野貴之

41092 中国都市住宅における設備と室内温熱環境に関する実態調査 その4 長沙及び重慶における冬期実測調査の結果 ○重野貴之 (東北大大学院)・吉野 博・吉野泰子・持田 灯・張 晴原・李 念平・李 振海・関 山・宮坂拓之

41093 中国都市住宅における設備と室内温熱環境に関する実態調査 その5 室内VOCs濃度および個人曝露量調査 ○熊谷一清 (東京大大学院)・倪 悦勇・篠原直秀・藤井 実・吉野 博・重野貴之・吉野泰子・柳沢幸雄

41094 中国都市住宅における設備と室内温熱環境に関する実態調査 その6 統計分析による室内濃度、個人曝露量の解析 ○倪 悦勇 (東京大大学院)・熊谷一清・篠原直秀・藤井 実・吉野 博・重野貴之・吉野泰子・柳沢幸雄

41365 大型吹出口近傍の温熱環境に関する実験的研究 その1 実験概要と天井吹出の場合の物理環境測定結果 ○武政祐一 (鹿島技研)・早川 眞・加藤正宏・村瀬孝道

41366 大型吹出口近傍の温熱環境に関する実験的研究 その2 各種吹出口による物理環境測定結果 ○村瀬孝道 (日本大)・早川 眞・武政祐一・加藤正宏

41367 大型吹出口近傍の温熱環境に関する実験的研究 その3 天井吹出の場合の被験者実験結果 ○早川眞 (日本大)・武政祐一・加藤正宏・村瀬孝道

41378 高層事務所建物への自然換気の導入条件の研究 その2 2001年大気汚染質の鉛直分布 ○古田直之 (日本大)・早川 眞・武政祐一

建築計画 I, II

5067 福祉関連地域利用施設の複合化に関する研究 ○石田道孝 (日本大)・鯉沼千晴・駒木智博

5178 多目的ホールにおける楽屋広さと位置について 藤沢市民会館、鎌倉芸術館におけるパレエ公演調査を通して (1) ○横田香苗 (パルス)・本杉省三

5179 多目的ホール楽屋ゾーンにおける出演者の行為と楽屋に対する要望 藤沢市民会館、鎌倉芸術館におけるパレエ公演調査を通して (2) ○本杉省三 (日本大)・横田香苗

5180 劇団の稽古場利用実態について (1) 東京都の劇団を対象とした活動アンケートによる調査研究 ○佐藤慎也 (日本大)・新野高史・本杉省三

5181 劇団の稽古場利用実態について (2) 劇団公演の実例観察による調査研究 ○新野高史 (ヴァンクラフト空間環境設計)・佐藤慎也・本杉省三

5187 障害者スポーツセンターの使い勝手について ○木下晃一 (日本大大学院)・野村 歡・八藤後 猛

5196 同一建築物内の複数で構成される診療所の診療連携実態 グループ診療所の建築計画に関する研究 (そ

の1) ○小林卓哉 (日本大大学院)・北野知裕・福田卓矢・八藤後 猛・野村 歡

5197 グループ診療を対象とした診療連携実態 グループ診療所の建築計画に関する研究 (その2) ○北野知裕 (フリー)・小林卓哉・福田卓矢・八藤後 猛・野村 歡

5403 手すり柵の乗り越えによる幼児の墜落防止に関する実験研究 乳幼児の家庭内事故防止に関する研究 その4 ○田中 賢 (積水ハウス)・八藤後 猛・野村 歡

5404 手すり柵の乗り越えによる幼児の墜落防止に関する実験研究と、建築安全計画のための考察 乳幼児の家庭内事故防止に関する研究 その5 ○八藤後 猛 (日本大)・野村 歡・田中 賢

5582 中国集合住宅の内装空間の現状把握について 延吉市におけるケーススタディ ○李 公朴 (日本大大学院)・宇杉和夫・金 永男

5584 最近の中国集合住宅住戸の平面類型化に関する研究 インターネットによる北京の事例調査 ○金 永男 (日本大大学院)・宇杉和夫・李 公朴

5631 車いす介助時の介助量を示す評価指標作成の試み 高齢者・障害者が居住する住宅の「屋外アクセス環境整備」に関する研究 (その1) ○鈴木基恵 (横浜市総合リハビリテーションセンター)・西村 顕・植田瑞昌・八藤後 猛・野村 歡

5632 車いす使用者を対象とした「屋外アクセス」の整備内容と介助量に及ぼす影響について 高齢者・障害者が居住する住宅の「屋外アクセス環境整備」に関する研究 (その2) ○西村 顕 (横浜市総合リハビリテーションセンター)・鈴木基恵・植田瑞昌・八藤後 猛・野村 歡

5743 SOHO事業に対応した集合住宅の住戸計画に関する一考察 ○飯田秀人 (フリー)・渡辺富雄・若色峰郎

5762 個人型子供室住宅の子供居住形式に関する研究 建築学科学学生アンケートによる記憶空間調査法 ○宮田智大 (日本大大学院)・宇杉和夫

5769 住まいミュージアムとしての総合住宅展示場に関する研究 埼玉県・神奈川県と比較 ○山田真揮 (日本大大学院)・宇杉和夫

都市計画

7231 降積雪量が地域住民の受診行動に及ぼす影響に関する研究—新潟県小出町を事例として— ○木村智博 (東京大大学院)・神田 順・三橋博巳

7246 木造密集市街地の防災向上策に関する研究 中野区平和の森公園周辺地区をケーススタディーとして ○半田良記 (東京都立大大学院)・三橋博巳

7334 景観学習としての小学校学習空間に関する研究 その1 学区の景観学習と景観エレメント ○宇杉和夫 (日本大)・矢幡匡崇

7335 景観学習としての小学校学習空間に関する研究 その2 学校からの眺望と望まれる景観要素 ○矢幡匡崇 (日本大大学院)・宇杉和夫

7392 多摩ニュータウン居住者における定住型コーポラティブ住宅に関する研究—ライブ 長池地区における

ケーススタディ その1 計画プロセスについて ○小島達雄 (日本大大学院)・塚部 彰・秋元孝夫・宇杉和夫

7393 多摩NT居住者における定住型コーポラティブ住宅に関する研究 ライブ長池地区におけるケーススタディ その2 空間構成について ○塚部 彰 (NPOフォー ジョン長池)・小島達雄・秋元孝夫・宇杉和夫

建築経済・住宅問題

8098 定期借家制度の利用実態に関する研究 その1 民間企業、行政の意識をとおして ○川本秋作 (日本大大学院)・近江大輔・石渡洋充・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也

8099 定期借家制度の利用実態に関する研究 その2 賃貸人・賃借人・管理会社へのアンケートをとおして ○近江大輔 (日本大大学院)・川本秋作・石渡洋充・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也

8108 PFI事業における管理・運營業務に関する研究 事業特性に応じた活用方策について ○小池裕之 (日本大)・小泉佳典・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也

建築歴史・意匠

9031 『源氏物語』にみられる六条院邸宅に関する考察 ○山崎裕子 (日本大大学院)・片桐正夫

9073 韓国における文化財建造物の修復に関する史的考察1 慶州「石窟庵」の第一次修理工事の再評価 ○崔 炳夏 (日本大)

9084 イースト・メボンにおける祠堂の寸法構成について ○小島陽子 (日本大大学院)・片桐正夫・重枝 豊

9086 クメール建築の「空積み」工法について アンコール・ワット西参道を事例として ○片桐正夫 (日本大)・三輪 悟・重枝 豊・崔 炳夏

9087 アンコール朝時代の古代橋について ○三輪 悟 (上智大)・片桐正夫・荒樋久雄

9088 プリア・カンにおける出入口の仕口の分布について ○永野真利子 (日本大大学院)・片桐正夫・重枝 豊

9095 ミーソンE1の建築構成について チャンパー遺跡の実証的研究 その14 ○重枝 豊 (日本大)

9099 クアンナム省Dien Ban県Dien Phuong社の伝統的民家の平面構成について 中部ベトナムの民家の実証的研究 その5 ○中澤寛美 (日本大大学院)・片桐正夫・重枝 豊

9100 崑山寺上殿の基本構成に関する一考察 ベトナム仏教寺院の総合研究 その12 ○大山亜紀子 (日本大大学院)・片桐正夫・重枝 豊

9206 李氏と関係のある山の景観と亭の空間構成について 韓国良洞村における眺望および景観構成手法について ○金 真鎬 (日本大大学院)・宇杉和夫

9286 オランダ現代建築の空間構成の特徴について 土地の記憶：ル・コルビュジェとの比較によるスロープの形態 ○植松善洋 (日本大大学院)・宇杉和夫

旅、出会い、建築

内田尚宏

そのドアをノックした時の緊張感は、今でもありありと覚えている。約20年前、私はマイアミのアルキテクトニカの前にいた。働かせてもらえる保証もないまま日本を飛び出し、カーンの作品を巡りながらバスでアメリカを横断し、ようやく辿り着いたのである。当時大学4年生だった私は、進路も決まらぬまま悶々とした日々を過ごしていた。机上で形態を操作するだけの課題への取り組み方に疑問を感じ、もっとそこに関わる人間や生活に手応えを感じたかった。そこで大学院に行くかわりに、1年休学し半年資金を稼ぎ半年遊学するという博打を打ったわけである。さして成績がいいわけでも将来に明確な目標があるわけでもない普通の学生が出した結論だった。「ただ旅をするだけでなく、勝負してこい」という恩師の勧めもあり、どうせ行くなら事務所で働いて、米国の設計事務所事情を肌で感じたいと考えた。そこで、英会話を学び、アルバイトで資金を稼ぐ傍らポートフォリオをまとめ、当時ビルに風穴をあけたデザインが一世を風靡し、GAで特集が組まれるほど脚光を浴びていたアルキテクトニカにラブレター(?)を書いた。が、返事は来なかった。何度書いても来なかった。

中に通されると、意外にも「待っていたよ」の言葉。得体の知れない東洋からの珍客に戸惑っているふしもあったが、若いスタッフたちは大歓迎してくれた。言葉のハンデを腕で補おうと、ドローイングを一生懸命やった。原寸模型も作った。スタッフの家を泊まり歩き建築について語り合った。アーキテクトとドラフトマンがはっきり分かれているアルキテクトニカのやり方は、模型から図面、細部に至るまで自分の手で実感しないと気が済まない私のようなタイプには、正直なところ違和感を覚えるものだった。しかし、勇気を出して押しかけ、戸惑いを覚えながらも約2カ月働いたことは、今振り返ると「設計をやるう」と覚悟を決めた転機だったのではないかと思う。

もちろん建築との出会いも、かけがえのないものだった。カーンのソーク研究所の中庭には1日たたずんでしまった。ドライな中庭に流れる一筋の水路はすこしずつ幅や落差を増やし、やがて大海へと至る。それぞれの場

筆者略歴

1986年 東京芸術大学美術学部建築科卒業
1986年 (株)タオアーキテクト
1994年 ドムスアカデミー(イタリア・ミラノ) インダストリアルデザイン科マスター修了
1995年 スタジオ・ウオヴォクールド開設



所で流れの音が違うのだ。研究者の心を癒す修道院の中庭のようなこの空間には、東洋の思想が流れていると実感した。空気、音、光など、実際にその場所に立って、その風に吹かれてみて初めて味わうことのできた感動だった。もうひとつある。ワシントンD.C.にあるベトナム戦争記念碑である。黄昏の中、広大な芝生の公園を散歩していた私は、何かに引き寄せられるように大地に切り込まれた長く黒い石壁のわきのスロープを降りていた。やがて自分の背丈を越え3m程に達する磨かれた黒御影石の壁には、無数の戦没者の名前が刻まれ、まるでレクイエムを聴いているかのように感じられた。大地と一体となった、身体感覚に訴えてくる建築には「命の重さ」というメッセージが静かに、しかし確実に体験するものに迫ってくる。私の仕事に川縁に立つ集合墓がある。「川のせせらぎのなかで、故人と対話する場所を創る」というコンセプトは、たぶん、この二つの体験がなかったら全く違うものとなっていただろう。モニュメントを創るのではなく、周辺を読み取り、五感に訴えかける場所をつくることは、私の設計活動の指針となった。

今思えば青春期に特有のモラトリアムだったかもしれない。旅の途中で出会った様々なことは偶然の一言で片づけられるかもしれない。でも、小さな殻を破ろうと勇気を出して行動を起こしたことが、かけがえのない出会いを引き寄せたと思っている。どうかいい出会いを。

(うちだたかひろ・非常勤講師)



川越の集合墓(1999)
手水場より延段によって集合墓へ導かれる。歩をすすめるにつれ、川のせせらぎが聞こえてくる。



中央に立ち、故人と対話する。納骨室の黒御影石に、流れる雲が映りこむ。
(撮影:高田 健)

「現代建築」を計る新しい定規

杉田義一

筆者略歴

1994年 日本大学大学院理工学研究科
建築学専攻修了
1994年 A.D.A. EDITA Tokyo 入社
1999年 『GA JAPAN』副編集長



「現代建築とは何か？」 毎年100件近く、日本の先端を走る建築家の設計した真新しい建築を実際に訪ね、彼らにインタビューする仕事を続けています。するといつの間にか、それを問い続けることが、個人的な最大テーマと位置づけられてきました。「そんなわかりきっていることを、今さら、何を言い出すんだ！」と思っている方も多いことでしょう。でも、ほくの取材過程において、冒頭の問いにきちんと答えられた建築家、もしくは建築史家はほとんどいませんでした。真摯に答えようとしてくださる方がいたとしても、「コルビュジエが……」とか「ミースが……」「ライトが……」と、学生の方々でもよく知っている建築家の仕事との対比でしか話すことができません。つまり、近代建築と定義づけられている、約100年も前に各巨匠たちが培ってきた「モダニズム」という定規に、未だに頼っているわけです。ほくらは知らず知らずの内に、「近代建築という呪縛」に苛まれ現代を語ってしまっていることを、ヒシヒシと感じてしまいます。ただし、現代日本の優秀な建築家たちは、現状をただ傍観してしまうような、表現者として無責任な態度はとっていません。特に4～5年前から、冒頭の問いに対して熟考し、何かしらのヒントを掴み、実際に結果を出す努力を始めています。その傾向は、端的に言うと、二つに分かれるようです。

一つは、建築を考える際の順番を180度変えること。各建築雑誌に目を通すと、建築家が執筆した作品解説文が必ず添付されています。設計演習の課題提出の際、それを参考に説明文を書かれた経験がある方も多いでしょう。彼らの解説は、大概、一つのルールに則っていたはず。まず、周辺環境について語り、次に敷地条件。さらに、そこで確保できる最大ボリュームと、その範囲内でのボリューム操作。そして、作為の入ったボリューム内のプラン割りが語られ、補足的に各ディテールのはなし……。つまり、雲の上に乗った神様が語るように、周辺環境に対する分析を行うことがまず最初。その後、だんだん、視野が下がり、やっと地に足のついた状態＝人間の目線になった時には時間切れで、申し訳程度の分析しかされていない。確かに、この思考法は、モダニズムの巨匠たちも使っていたし、設計演習の時にも「こうしなさい！」と習った手順です。でも、「ちょっと待てよ？」と感じていた人は、少なからずいるはず。「実際の建築は、空から眺めている神様が使うものではなくて、ほくら人間が使うモノなんじゃないか？」と。さらに言え

ば、特に現代都市は、短期間に様相が変わってしまうので、ある時点での状況分析をしたって、そのまま持続しているとは限らない。そんなの、東京を歩いたことがある人なら、誰でも知っています。そこで、「まず最初に人間の目線で考えれば良いじゃないか」というアイデアが生まれてきたわけです。人間として顕れる「強い欲求」の風船を一生懸命膨らませていった結果が、素直に建築になればいいじゃないかと。結局、大きな風船を神様から宛われ、それをドンドン萎ませていく「外から内へ」という思考ベクトルから、「内から外へ」と自らの発想を膨らませる方向に、建築を考える順番を転換すればいいというわけです。

もう一つの傾向は、建築を考える際に、「新しいルールを顕在化させたい」ということ。誤解を恐れずに言えば、今まで作られてきた建築のほとんどは、「力の流れ＝ストラクチャー」もしくは「機能の配列＝プラン」を顕在化させるためのルール作りで終始していたと思います。その傾向が端的に、そしてよりシンプルに顕れていたのは、正にモダニズム建築における数々の秀作だったわけです。確かに、その二つの重要度は認めますが、現代において、果たしてそれだけが最重要課題なのでしょうか？ 今、建築を具現化するテクノロジーとマテリアルの選択肢の幅は、モダニズムの頃に比べると格段に拡張しています。その現状を皆知っているのに、建築化する際のルールづくりが二つだけに収束されるなんて、余りにも選択肢の幅が狭すぎる。せめて、もう一つだけでも新しい要素を付加し、それを第一ポテンシャルのルールとして顕在化させれば、「個々人の欲求」を素直に表出させるチャンスがより高まるはず。例えば、コンピュータの進歩によって格段に進化した「幾何学のルール」。ハイブリット化や純化がより進んでいる「素材のルール」。さらに、宗教や政治など社会的背景を背負わずに成立できる可能性を孕む「装飾のルール」。それらが、先の二つのルールを乗り越えて、第一ポテンシャルに昇華できれば、建築表現が格段に進歩する可能性があるはず。

いずれの傾向にしろ、「現代建築とは何か？」を知るヒントをほくらに与えてくれていることは確かです。ほくの携わっている『GA JAPAN』では、その数々のヒントを少しでも読者に提供して、「現代建築」を計る新しい定規をとともに作り続けていきたいと考えているのです。 (すぎたよしかず・編集者)

建築設備・建築環境：早川・蜂巢研究室

早川眞教授，蜂巢浩生専任講師

早川 眞 蜂巢浩生

建築設備，建築環境を専門とする研究室です。「快適で健康的な建築空間」を「環境負荷低減に配慮しながら」実現するのに必要な環境・設備の基礎知識の修得を目標にしています。建築設備の面では「環境負荷低減に配慮した省エネルギーシステムの実現と運用」や「医学や薬学の進歩に貢献する実験動物施設」に関する研究などを，建築環境の面では「通風・換気・気流や熱環境」などについて，大学施設の建設計画・維持管理に関わりながら生きた教育・研究を行うとともに，企業の研究所や他研究機関との共同研究も行っています。

以下に，現在実施中，あるいは実施予定の研究を紹介します。

●CO₂排出量の削減に配慮した都心立地型大学施設の設備システムの研究

地球温暖化の防止が緊急を要する課題です。京都議定書への批准内容の実行のため，エネルギー大量利用の施設は早晚，CO₂排出量の削減や省エネルギーを厳しく求められることになるでしょう。本研究はこれに備えて日大駿河台キャンパスの省エネルギー，省資源を図り，同種の大学施設の計画資料を得ることを目標としています。

- 1) 9号館を中心とした既存施設の分析と改修提案
- 2) 1号館の快適性と省エネルギーを狙った建物運用の研究
- 3) 船橋14号館の快適性と省エネルギーを狙った建物運用の研究（予定）

●高層建物への自然換気の導入の研究

グリーンビル（環境負荷低減建築）の具体案の一例として，自然換気の導入を実現するための各種問題点の解決に取り組んでいます。平成13，14年度は大型吹出し口からの給気方法に関する実験を行いました。また，高所空気の汚染質の性状把握として東京タワーでの東京都の観測値を分析すると同時に駿河台キャンパスでも観測を始めます。



●混合・置換併用換気システムの提案と効果の検証

講堂やホールでは「置換換気」という室の下方から上方への押し出し流れによる換気方式の採用が増えていますが，換気効率が高い反面，気流や除湿で問題点があります。従来の混合換気とそれぞれの良いところを取り入れた換気・空調システムを1号館CSTホールに提案し，現在，効果の検証中です。

●実験動物施設の環境制御に関する研究

我々は日々の生活の中で，実験動物から得られる実験結果によって生み出される多くの技術・製品の恩恵を受けています。その実験成績の精度を保証し再現性を得るためには，実験動物の遺伝的統御とともに，動物を取り巻く様々な環境因子が適切に制御されていなくてはなりません。また，実験動物施設はエネルギー多消費型施設であるため省エネルギー対策についても関心が高まってきています。本研究は環境工学の分野から実験動物施設に求められる設備・環境について，その基準の充実や体系化に取り組んでいます。

●その他

当研究室でもマナーについては相当うるさく注意します。それは，研究の多くが学外の研究機関・企業と進んでいくので，社会人の方たちとの接点も多くなるため，学生同志だけでなく，こうした社会人の方たちとのチームワークが求められるからです。チームワークの乱れは研究の進捗に大きな障害を発生します。チームワークをきちんととれる学生を望んでいます。

（はやかわしん・教授，はちすひろお・専任講師）



授業中の二酸化炭素濃度測定風景
(CSTホール)

建築学科電算室の利用

宇於崎勝也 森泉和人



電算室の様子

建築学科電算室を知っていますか？

建築学科，建築学専攻，不動産科学専攻に所属する学生ならばパーソナルコンピュータが自由に使用できる部屋があります。今回は電算室をより有効に使ってもらえるよう紹介をします。

場 所：駿河台校舎 5号館 9階 594室
(エレベータホールに面した黒扉の部屋)
開 放：月曜日～金曜日 (休校・休講日を除く)
11:00～19:00 (昼休み13:30～14:30を除く)
サービス：インターネットに接続できるパーソナルコンピュータ 32台，カラー・モノクロ印刷，スキャナーなどが使用可能 (無料)

電算室にはMicrosoft WindowsをOSとするコンピュータ (24台) とMacOS XをOSとするもの (8台) があります。いずれもMicrosoft Officeのアプリケーションが利用可能です。Ms-Word, Ms-Excel, Ms-PowerPointなど1年次のコンピュータリテラシで習得したアプリケーションを自由に使える他，Internet Explorerやメールソフトを用いてLAN・インターネットを通じての情報の受・発信が可能です。台数制限はありますが，写真や画像を加工，図面の作成などもできるアプリケーションも利用可能です。また，作成した文章や図面を印刷することもできます。モノクロレーザープリンタ，カラーインクジェットプリンタはA3版まで対応可能ですし，B0版まで印刷可能な大型プリンタも設置されています。A3版まで対応可能なカラーイメージスキャナもあり，写真や図面のイメージの取り込みもできます。

レポート・課題の作成やインターネットを利用したの情報収集 (就職活動など)，自分のノートパソコンで作成した作品の印刷など，多様な目的での利用が可能なよう整備を行っています。なお，コンピュータの使用方法やアプリケーションの活用の仕方がわからなくても，管理者が常駐し，丁寧に指導してくれますので安心です。

電算室利用の手順を図に示しています。難しいことはありませんので，気軽に訪ねてください。

なお，利用にあたって若干のルールがありますので，これだけは守ってください。

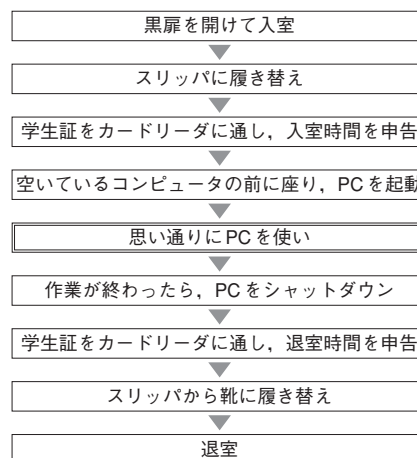
- 1) 室内での喫煙，飲食は厳禁です。濡れた傘など水がこぼれるものは持ち込めません。
- 2) 多人数・大声による会話は禁止です。各人がそれぞれの目的に応じてPCを利用していますので，他人に迷惑がかからないようにしてください。
- 3) 自分のデータは自己責任で保管してください。データをPCのハードディスクなどに残さないでください。
- 4) PCの設定を変更しないでください。

建築学科では皆さんの教育・研究活動が少しでも促進するよう，環境整備を行っています。電算室で何か整備して欲しいという要望があれば，どんどんお寄せください。また，Webサイトを利用した情報発信などのサービスも行っていますので，そちらも活用してください。

URL <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

(電算室管理者グループ・うおぎきかつや・専任講師，もりいずみかずひと・助手)

利用の手順



飛騨・高山学生家具デザイン大賞

福原 亮



授賞式の様子

コンペ概要

飛騨の国は、古い町並みや豪華絢爛な祭り屋台で知られる飛騨高山を中心に、伝統文化の息づく町々と豊かな自然景観が独自の美を織り成す観光地として知られています。また、奈良の都を造り上げた木工職人「飛騨の匠」の伝統や技術が今に伝えられる地として、木工産業の盛んな地方でもあります。

この「第8回飛騨・高山学生家具デザイン大賞」は、飛騨・高山が木工家具の産地であることをより一層、多くの方々に知ってもらうと同時に、これからの家具デザインを担う若い人たちのエネルギーを何らかの形で集約し、そこから素晴らしいデザイナーが育つことを願って、毎年企画されているコンペティションです。今回は、飛騨高山の街の中で、【バリアフリー】をテーマにした「ベンチ」のデザインを募集し、製作可能な作品は実際に街に設置する予定というものでした。(主催：2003飛騨高山暮らしと家具の祭典実行委員会・(協)飛騨木工連合会、作品提出数：1140点 入選数：12名 入賞者数：16名)

感想

今回、このコンペに取り組むにあたり、学校の設計演

習Ⅱの課題提出時期と重なったため、時間のやりくりが一番苦勞しました。私にとって初めてのコンペだったので、何もかもが新鮮で大変楽しみながら制作できました。敷地が飛騨・高山という大変遠い場所だったので、敷地調査へは行けなかったのですが、インターネットや本で洗いざらいに調べてイメージを膨らませてエスキースに入りました。今回のコンペを通して一番勉強になったのは、レイアウトの難しさです。提出前に横河先生に見ていただき、コンペでのレイアウトのpointを教えてくださいました。「コンペ第一次審査は2、3秒の勝負だよ！」という言葉で、モヤモヤしたものが吹き飛びました。高山での受賞式には横河先生も出席してくださり、『ものづくり』について熱く語ってくださいました。ありがとうございました。他校の受賞者と知り合う機会も持てたので、今回のコンペでは大変貴重な経験ができました。出展数1140点の中から金賞に選ばれたこの奇跡的な出来事に、今も感動で一杯です。

受賞作品は [http://takayama-cci.or.jp/mokkou/2003/taisyo/index.html] に載っていますのでご参照ください。

(ふくはらりょう・横河研4年)



金賞 福原亮案

ねえねえ聞いて！！

このベンチの座面のひとつは車椅子の座面と同じ高さなんだ！！
ひとつベンチをたんでそのスペースに入れば私たち車椅子利用者も
みんなと同じ目線で充電できるね！！
このベンチは座の高さが変わるだけじゃないんだ！！
しかも折りたたみば、私たちの通行の邪魔にもならないね。



どんな人でもうれしいね！！

福祉のまちづくりに力を入れている飛騨高山！
もともと通りは歩きやすいけれどこんなベンチだったら、
私たちみたいに乳母車を押して歩く観光客にもうれしいね。

町並みのリニューアル

「観光都市・飛騨高山」ならではの私たちの提案！！
「ばったりで町並みを整備。昔の情緒を復元しよう。
きっと飛騨らしさが生まれるはず。本町通りを飛騨の新たな顔にしよう。」

イメージピクチャー



銀賞 山代巨・市川弘美・小川佳菜子・奥津昌子・木戸のぞみ・鈴木信太郎・中田弾・橋本悠歩・保戸塚智宏・三浦康太郎（野村研・4年）案。
また、これらの受賞により、日本大学理工学部は「優秀校賞」を受賞した。

■富田隆太助手，井上勝夫教授，川又周太君（03年修了）連名の原著論文「高齢者及び成人の歩行特性と歩行感からみた床仕上げ構造に関する検討」が，日本建築学会環境系論文集No.569（2003年7月号）に掲載された。

■小沢直君（本杉研D5），本杉省三教授連名の原著論文「既存舞台上における仮設劇場製作について 新国立劇場・中劇場における太陽劇団『堤防の上の鼓手』公演を事例として」が，日本建築学会計画系論文集No.571（2003年9月号）に掲載された。

■井上勝夫教授は，2003年度日本建築学会大会（東海）環境工学部門の「建築環境関連の法的トラブルの現状と今後の研究課題」と題する研究協議会にて，「建築環境関連のトラブル発生状況」をテーマに発表した。また，同教授は，日本建築学会司法支援建築会議主催の講演会「都市居住を巡る建築紛争」にて，「マンションの騒音問題の現状」を発表した。

■羽入敏樹短大専任講師は，関口克明教授，星和磨短大副手と連名で，イギリス・マンチェスターのSalford大学で開催された音響に関する国際シンポジウム「Surface Acoustics」にて，「Column Type Diffuser for Supplying

教室ぷろむなード

Reflections from Behind without the Use of Back Wall Effects in a Concert Hall」を発表した。

■柳田武専任講師が主査を務める建築学会・計画設計情報小委員会による『計画設計のための建築情報用語事典』（日本建築学会編，鹿島出版会）が刊行された。同書は，同委員会が活動の一環として進めてきた出版作業の成果。また，同専任講師が空間研究小委員会の委員・出版WG委員として編集・執筆に携わった『空間要素』（日本建築学会編，井上書院）が刊行された。同書は，先に刊行された『空間体験』（1998年刊）『空間演出』（2000年刊）に続く『世界の建築・都市デザイン』シリーズの3冊目で，豊富なカラー写真と解説による事例紹介が中心で，特に1，2年生にぜひ一読を勧めたい本である。

■企画経営コース設置15周年を記念して，『企画経営コース15周年記念誌』（企画経営コース15周年記念誌編集委員会編）が刊行された。

■石崎哲也君（今村研M1）が，「新建

築住宅設計競技2003 1等」（主催：（財）吉岡文庫育英会，（株）新建築社）を受賞した。「建築ウィルス」をテーマに，坂村健氏を審査員に迎えて行われたもの。



建築ウィルス

■横田裕史，川上恭輔（本杉研M1），落合正行（高宮研M1）の「アミダコミュニケーション」が，「代官山インスタレーション'03」（主催：代官山インスタレーション実行委員会）にて入選し，実際に制作・展示される。代官山の街並みに，インスタレーション作品を展示することで，都市とアートの新しい関係の構築と共存の可能性を探る提案が求められたもの。展示期間は11月22日～12月14日，場所はヒルサイドテラスB棟ペダストリアンデッキ壁面。同賞については，[http://www.artfront.co.jp/d-insta_03/]を参照のこと。



アミダコミュニケーション

ねえねえ聞いて！！

このベンチの座面のひとつは車椅子の座面と同じ高さなんだ！！
ひとつベンチをたんでそのスペースに入れば私たち車椅子利用者も
みんなと同じ目線で充電できるね！！
このベンチは座の高さが変わるだけじゃないんだ！！
しかも折りたたみば、私たちの通行の邪魔にもならないね。



どんな人でもうれしいね！！

福祉のまちづくりに力を入れている飛騨高山！
もともと通りは歩きやすいけれどこんなベンチだったら、
私たちみたいに乳母車を押して歩く観光客にもうれしいね。

町並みのリニューアル

「観光都市・飛騨高山」ならではの私たちの提案！！
「ばったりで町並みを整備。昔の情緒を復元しよう。
きっと飛騨らしさが生まれるはず。本町通りを飛騨の新たな顔にしよう。」

イメージピクチャー



銀賞 山代巨・市川弘美・小川佳菜子・奥津昌子・木戸のぞみ・鈴木信太郎・中田弾・橋本悠歩・保戸塚智宏・三浦康太郎（野村研・4年）案。
また、これらの受賞により、日本大学理工学部は「優秀校賞」を受賞した。

■富田隆太助手，井上勝夫教授，川又周太君（03年修了）連名の原著論文「高齢者及び成人の歩行特性と歩行感からみた床仕上げ構造に関する検討」が，日本建築学会環境系論文No.569（2003年7月号）に掲載された。

■小沢直君（本杉研D5），本杉省三教授連名の原著論文「既存舞台上における仮設劇場製作について 新国立劇場・中劇場における太陽劇団『堤防の上の鼓手』公演を事例として」が，日本建築学会計画系論文No.571（2003年9月号）に掲載された。

■井上勝夫教授は，2003年度日本建築学会大会（東海）環境工学部門の「建築環境関連の法的トラブルの現状と今後の研究課題」と題する研究協議会にて，「建築環境関連のトラブル発生状況」をテーマに発表した。また，同教授は，日本建築学会司法支援建築会議主催の講演会「都市居住を巡る建築紛争」にて，「マンションの騒音問題の現状」を発表した。

■羽入敏樹短大専任講師は，関口克明教授，星和磨短大副手と連名で，イギリス・マンチェスターのSalford大学で開催された音響に関する国際シンポジウム「Surface Acoustics」にて，「Column Type Diffuser for Supplying

教室ぷろむなード

Reflections from Behind without the Use of Back Wall Effects in a Concert Hall」を発表した。

■柳田武専任講師が主査を務める建築学会・計画設計情報小委員会による『計画設計のための建築情報用語辞典』（日本建築学会編，鹿島出版会）が刊行された。同書は，同委員会が活動の一環として進めてきた出版作業の成果。また，同専任講師が空間研究小委員会の委員・出版WG委員として編集・執筆に携わった『空間要素』（日本建築学会編，井上書院）が刊行された。同書は，先に刊行された『空間体験』（1998年刊）『空間演出』（2000年刊）に続く『世界の建築・都市デザイン』シリーズの3冊目で，豊富なカラー写真と解説による事例紹介が中心で，特に1，2年生にぜひ一読を勧めたい本である。

■企画経営コース設置15周年を記念して，『企画経営コース15周年記念誌』（企画経営コース15周年記念誌編集委員会編）が刊行された。

■石崎哲也君（今村研M1）が，「新建

築住宅設計競技2003 1等」（主催：（財）吉岡文庫育英会，（株）新建築社）を受賞した。「建築ウィルス」をテーマに，坂村健氏を審査員に迎えて行われたもの。



建築ウィルス

■横田裕史，川上恭輔（本杉研M1），落合正行（高宮研M1）の「アミダコミュニケーション」が，「代官山インスタレーション'03」（主催：代官山インスタレーション実行委員会）にて入選し，実際に制作・展示される。代官山の街並みに，インスタレーション作品を展示することで，都市とアートの新しい関係の構築と共存の可能性を探る提案が求められたもの。展示期間は11月22日～12月14日，場所はヒルサイドテラスB棟ペダストリアンデッキ壁面。同賞については，[http://www.artfront.co.jp/d-insta_03/]を参照のこと。



アミダコミュニケーション

偲



石田先生(左)と筆者

専任講師石田道孝先生は、日本建築学会大会に参加のため名古屋に赴いていたが、脳梗塞のため、9月8日に急逝された。あまりにも突然で、建築教室に大きな衝撃が走った。

石田先生は、大学院終了後、一時、工業高校に勤めていたが、昭和45年、恩師の木下茂徳先生に請われ、母校の教授陣の一員に加わった。爾来、33年もの長い間、石田先生と私は、同じ研究室で兄弟弟子として、木下先生の薫陶を受けてきた。

そんな関係であるから、思い出はそれこそたくさんある。若い頃は公私にわたって寝食をともにした。木下先生のお宅の玄関前の坂道で、停めていたはずの石田先生の自動車が坂道を、突然独りで走り出し、慌てて自動車を追っかけたが隣家の垣根を壊してしまったこと、第三京浜国道を150kmで自動車を飛ばしていたこと、大学院生との月例ボウリング大会のとき、石田先生はユニホームとマイボールを持って颯爽と体を動かしていたこと、また、木下先生とどこかの宿に宿泊したとき、2階に寝ていた木下先生の鼾が1階に寝ていたわれわれの寝床まで聞こえてきて、とてもおかしくて2人で笑っていたことなど、走馬燈のように思い出される。

やがて、木下先生が理工学部長、日本大学総長と

して多忙を極めることになり、石田先生は木下研究室の学生の指導や学事や雑事をすべて引き受け、骨身惜しまず奮闘され、本当に頭の下がる思いがした。

そういえば、石田先生は何事にも全力投球だった。教育にも学生指導にも決して手を抜こうとはしなかった。特に、最近船橋校舎14号館新築工事中の設計製図室には、学生に少しでもよい環境を、と考えていたのだろう、教室内の家具の一つ一つ的设计に、本当に寝食を忘れて情熱を注ぎ込んでいた。

一方、石田先生は、数々の趣味の世界にも通じていた。若い頃は鯉や熱帯魚の飼育に情熱を傾け、最近蘭の飼育にも相当に精魂込めておられたようで、プロはだしと聞いていた。

このように振り返ってみると、どう見てもオーバーワークと思われるのに、また、50歳を過ぎた頃からいくつかの病気や怪我と闘いながらも、その手を緩めることはなかった。しかし、このような全力投球が逆に石田先生の命を縮めてしまったのではないかと、悔やまれる。

今頃は、石田先生は天国で自分の育てた蘭に囲まれて、安らかな休息を味わっていることだろう。

(野村 歡・教授)

● 駿建目次

(2003.11 Vol.31 No.3 通巻125号)

表紙 「西所沢の住宅」

設計：佐藤光彦

撮影：新建築社

JIA 新人賞を受賞して	2	私と建築	18
京の町家学生設計コンペティション	4	研究室紹介	
オリエンテーション報告	6	早川・蜂巢研究室	20
オープンキャンパス報告	7	建築学科電算室の利用	21
第35回建築学生海外研修旅行報告	8	飛騨・高山学生家具デザイン大賞	22
2003年度日本建築学会大会(東海)		教室ぶろむなーど	23
建築学科教室関係者発表論文リスト	13	偲	24

『駿建』

発行者・片桐正夫：千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

編集委員：本杉省三・岡村武士・根上彰生・重枝 豊・渡辺富雄・石垣秀典・佐藤慎也・星 和磨

印刷：奥村印刷株